

生命論的システム論としてのソフトシステム方法論

——ソフトシステム方法論のアクチュアリティ論からの再考——

内 山 研 一

(0) はじめに

元来システム論は、還元主義的な「科学」とは相容れない立場を取りつづけてきた。「一般システム理論」を提唱したベルタランフィの「部分の総和は全体にならない」という要素主義の否定は、その一つのマニフェストである。その後、システム論は機械システムの還元論とは違った生命論的システム全体論 (wholistic approach) に向けて、機械には還元できない生命の特性を説明しようと努力を続けてきた。

河本¹⁾は、システム論の歴史を3世代に分けている。それによると第一世代はベルタランフィなどの「有機構成 (organization)」の世代で、物質代謝する有機体をモデルにして、外界との物質代謝を行ないながら、なお自己維持する秩序だった機構をシステムとして研究するものだった。このためシステムは必然的に開放系であって、開放系のまま定常性を維持するホメオスタシスなどの概念が考えられた。確かにホメオスタシスは生命の主要な特徴の一つであるが、この安定した階層がどのように生成されるかは第一世代のシステム論では問われなかった。この課題は次の第二世代のシステム論が立ち向かうことになり、システム論の関心は関係から生成に焦点が移った。

第二世代のシステム論のキーワードは、「自己組織化 (self-organization)」である。自己組織システムのモデルとなるのは、成長を続ける結晶であり発生胚である。結晶は溶液中から突如析出し、環境条件に対応して形態を変化させながら成長を続ける。また発生胚は未分化な全体から分節を繰り返し部分の成立と同時に部分間の関係が成立する。生成を通じてそれ自体で秩序の形成を行ない、一定の環境条件の下で「自己」そのものを形成する。自己組織化の論理は、無機的現象の自己組織化を研究領域とするプリゴジンやハーケンのグループと、有機的現象以上の自己組織化を研究するアイゲン、ロートのグループに分かれるが、いずれも研究は現在進行中であり両者の架橋を含めて未だ整理されていない。自己組織化の理論は確かに生命の主要な特徴であるが、「自己を自己自身で作り出す」という「自己言及」の論理を含んでいるので理論的には早晚壁にぶつかってしまう。たとえば無機的自己組織性の事例として上で述べた「成長しつづける結晶が自己組織システム」だというとき、確かにアウトプットとしての結晶は自己組織的に同じものを

作りつづけているわけであるが、その生成の機構である自然科学的法則（コード）自体は不変である。また有機的自己組織化の例である発生胚の場合も、自己組織化するためのコードは遺伝子の中に組み込まれているわけで、第二世代の自己組織化論では、このコード（産出規則）自体の自己言及には理論は及んでいない。つまり自然現象はきわめて安定で不変なコードを基礎にしているので、現象それ自体自己組織的になり得ても、コード自身に自己言及が及ぶようなオートポイエーシスにはなり得ない。

実はこのコード自体の自己組織化に言及するためには、システムの見える部分である入出力とシステムの（コードが体现されている）プロセスそれ自身とを同時に視野の中に入れたシステム論が要請される。だからこのプロセスを含めた自己組織化の場合は、ある意味でアウトプット（出力）もプロセスの中に包含されてしまうのである（独語のBildungは、産出しつつあるプロセスと産出されたものを同じ形で表している）。そこで第三者（観察者）から見てアウトプットのように見えるのは、この自己組織化のプロセスの一種の廃棄物に過ぎない。これがマトラーナとヴァレラの有名な「システムには入力も出力もない」という意味の全てである。

第三世代のシステム論は、マトラーナとヴァレラの「オートポイエーシス～生命の有機構成」（1972）によって始められた。河本²⁾によれば、オートポイエーシス（自己産出）の特徴は自律性、個性性、境界の自己決定、入力と出力の不在の四点だという。「自律性」は、あらゆる外的内的な変化にもかかわらず自己を保持することであり、「個性性」は栄養物を取り入れて自分自身の一部に変換し組み込むこと、そして「境界の自己決定性」は、免疫システムのように自己と非自己の境界が区分されている事態を考えればよい。これらの特徴は全て生命の際立った特徴として一応は考えられるだろう。

ところで「オートポイエーシス理論」の理解を困難にしているのは、この最後の「入力と出力の不在」である。今まで多くのオートポイエーシス・システムの解説者が誤解し、マトラーナ、ヴァレラ自身もすっきりした説明に苦慮していたこの四番目の特徴を河本は次のように解説している³⁾。

人間の体を構成する細胞は、不断に新陳代謝を行っている。細胞は自ら構成要素を産出する活動を行っているだけであって、細胞が大気中の酸素と自分の関係を考えながら、酸素との関連を調整しながら構成要素を産出しているのではない。結果として酸素濃度との関係で、細胞の産出活動が影響を受けることはある。しかしその影響を判断するのは観察者であって、細胞ではない。細胞の作動に内的な視点からシステムを捉える限り、システムそのものにとっては「入力も出力もない」のである。オートポイエーシスの視点を一貫させる限り「入力も出力もない」という特徴は必然的な結果である。

上記引用の中でキーとなる主張は視点の移動である。つまりオートポイエーシス・システムにおいては、視点を三人称から一人称へ移すのである。観察者から当事者への視点の移動と言ってもよい。（後に考察するように、これは視点や観点の移動というよりは、むしろ認識から行為への次元の転換である。）また河本（前掲書）によれば、自己組織システムとオートポイエーシス・シ

システムの違いを次のように説明する。「ビーカー内で自己組織化している結晶は、容積を支えるビーカーという入れ物によって支えられている。いわばビーカーは位相的外部である。ビーカーを必要としているうちは自己組織性であってもオートポイエーシスではない。ビーカーという自己組織化を支える空間構造を自ら自身で構成するようになったとき、オートポイエーシスが成立する。」あるいは、アウトプットである結晶が再度結晶の生成プロセスを産出しているのではない。自己組織システムは確かに結晶というアウトプットを産出するが、この析出された結晶が再度自らを産出する生成プロセス自身を産出するようになったとき、生命が誕生しオートポイエーシスが作動したと言えるのである。

以上のようなオートポイエーシスの観点は、三人称的観察者の立場からは不可能である。科学的認識の立場からすれば、位相的外部にあるビーカーを結晶生成プロセスの中に取り込んだり、結晶自身が結晶産出のプロセスを再度生成するということは、ラッセルの逆説（「クレタ島の人々はすべて嘘つきである」。とクレタ島の人が出たとき、その言明が嘘か本当かということは客観的には決められない）が含意する「自己言及性」を伴っている。もちろんラッセルの逆説も、発言者やその“場”のコンテキストを解釈することによって推測することはできるが、一番確かな方法は発言者自身になることである。つまりこのパラドックスは一人称の立場からは何の意味もないパラドックスになる⁴⁾。またビーカーの空間的制約は、モノとしての空間という第三者的立場を離れたとき取り払われる。オートポイエーシス・システムは、すぐれて一人称的私的システムである。

ここで少し視点を変えてこのことをわれわれ自身の「自己同一性」の経験から説明してみよう。昨日の「私」と今日の「私」、そして一分前の「私」とこの一瞬前の「私」は、客観的には三人称名詞「自己」と指示できるような、当然それぞれの時点で異なった「私」である。しかしこれらの「私」という「自己」は、それぞれの時点で異なりながらも一人称的主観的には同一の「私」というプロセスでもある。そしてこのことが保障されるのは、この後者のプロセスとしての「私」が「私」自身にコードも含めて自己言及できるオートポイエーシス・システムとして考えられるからである。

第三者（観察者）から見た場合、必ずしもこのことは保障されていない。それぞれの時点で「私」を構成している物理的条件も心理的条件も異なっていることは事実的に観察可能である。仮にそれぞれの時点の「私」の遺伝子が同じであっても一方はクローン人間かもしれないし、遺伝子精査の機器に誤作動があるかもしれない。そういうすべての不確実性を超えて「私は私である」と言えるのは、他ならぬこの一人称のプロセスとしての「私」自身でしかありえない。そのとき、この「私」の身体や過去の「私」は「私」というオートポイエーシス・システムのアウトプットであり副次的な産出物でしかない。そしてその具象的「私」は三人称的对象的にしか存在していない。私が私自身で自分の身体を観察する場合でも、それは三人称としての私が私の身体をモノとして客観的に見るのであって、一人称的身体も含めた「私」自身が私の身体を見ているのではない。一人称的「私」は身体を感じることはできない。

この場合の一人称的プロセスとしての「私」とは決して認識的立場からは言語化できない行為的な「私」である。言語化できるのはせいぜい「私」の意識の上に残したイメージ、残像、あるいは「私」の副産物（アウトプット）としての生物学的モノ的「私」である。従来の科学的生命論は、いわばこの副産物であるモノ的「私」しか見えていなかったし扱ってこなかった。本来の生命的「私」は、このモノ的「私」を超えたコト的行為的「私」である。しかしコト的行為的「私」は対象化し言語化できない「私」でもある。それゆえ従来の「科学」の方法論で扱うということではできない。科学は五感で認識できるモノしか扱えないし、またモノに還元できないものを学問から排除してきた。何故なら学問は「いつでもどこでも誰がやっても同じ結果」が得られる、公共性や客観性の上に成り立っているからである。オートポイエーシス論は、まさにこの科学の最右翼まで登りつめて、科学のスキャンダルである「認識と行為の裂け目」を覗いてしまった。

オートポイエーシス論理解のキーは、従来の三人称的、観察者の、客観的、公共的、認識的、モノ的立場を捨てて、いったん一人称的、当事者の、(間)主観的、私的、行為的立場に立ち戻ることである。そしてオートポイエティックな「生命論的システム論」とは、この両者の立場が二元論(dualism)でなく相補的二重性(duality)の関係にあることを理論と実践のフィールドで記述していくことである(この両者の立場が分裂することによって精神分裂病が起こる)。「生命論的」とは、「生きもの」という言葉が現しているように、生きてある「モノ」であると同じに生きていゝる「コト」なのだから。

ここまでが簡単なシステム論の世代論的發展史の要約である。そして本論文「生命論的システムとしてのソフトシステムズ方法論(SSM)」は、第三世代のオートポイエーシス論が行き着いたまさにこの地点からスタートする、いわば第3.5世代のシステム論である。システム論の流れの中でSSMはオペレーションリサーチ(OR)、システムアナリシス(SA)、システムエンジニア(SE)などの実践的なシステム方法論をその誕生の母体に持っており、実践的システム論の文脈に位置付けられるが、もともと「システム論」はシステム実践と相伴って相互作用的に発展してきたものである。SSMの創設者P. チェックランド自身、プリゴジンの前の「国際一般システム学会」の会長も務めている理論家でもある。また最近のチェックランドの論文⁵⁾でも、オートポイエーシス・システムの理論とSSM方法論の類似性を指摘した。

そこで本論文では、チェックランドの実践的なSSM方法論の理論的フレームワークを現象学的精神病理学者木村敏の「行為的生命論(アクチュアリティ論)」をベースに再解釈し、行為論的生命論(アクチュアリティ論)から見たSSMの可能性を模索するものである。

本来ならばこの種の試みは、「科学論」を視野に入れたもう少し大きな「学問論」的枠組みの中で議論することが望ましい。そのためにはアクションリサーチ(行為研究)の中にSSMを位置付けることが必要であるが、今回は紙数の都合で見送った。またSSMはすぐれて実践的な方法論であり実践による学習によって理論が触発され、その理論がまた実践に応用されるというインタラクティブなサイクルがスパイラル状にまわるので、実践的なケースや経験に基づいた知見を盛り

込むことは必須であるが、これも紙数の関係で割愛せざるを得なかった。「経営学」的関心から言えば、実際の企業や組織の経営上にSSMをリフレクションして見ることにより興味があるわけであるが、これも他日を期すことにする(英文の論文としては、巻末文献(91)～(95)参照のこと)。

(1) ソフトシステム方法論誕生の経緯

SSMを説明するにはその誕生の経緯をまず簡単に述べておくのが理解しやすいので、以下に1960年代終わりから1970年代初めにかけての欧米のシステム実践の状況を描写してみる。

20世紀最大のイベントは幾つか考えられるだろうが、1960年代終わりに米国のアポロ計画の成功によって人類が初めて月に立ったことをその一つとして数えることができるだろう。このアポロ計画は、当時の米国のジョン・F・ケネディ大統領の「米国は国家の威信を賭けて60年代中に人を月に送り無事帰す」という明確な宣言によって始められた。そしてアポロ計画成功のためには、豊富な国家予算と人的資源が惜しみなく投入されたことはもちろんであるが、特にこのプロジェクト運営の成功のキーとなったのは、当時のプロジェクトマネジメントの最先端の手法であったシステム工学やシステム分析といった「システム方法論」であることが知られている。

そして、これらの手法がほとんど完璧にワークし計画を成功にもたらしたことから、人々は今度はこれらの手法を社会問題や経営問題に応用しようと試みた。テクノロジートランスファー(TT)とか、テクノロジーアセスメント(TA)というスローガンが政策科学や経営科学の分野でも叫ばれ、米国生まれのこれらのシステム方法論ベースのマネジメント手法が1970年代、1980年代の世界のこの分野の流れを支配していった。そして、システム工学やシステム分析はもはや技術の領域を越え、社会問題の解決や企業経営のマネジメントの分野にも万能であるという感覚を人々に与え続けているのである。

しかしながら結論から言うと、これらの「システム」という名を冠せられた手法は大方の社会問題の領域では失敗した事が報告されている⁶⁾。その理由は幾つか考えられるが、最も大きな理由の一つは、社会問題では、「何が問題であるか」という問題の定義が明確に下せないということがあげられている。たとえばニューヨークのゲットーの問題では、黒人のある人々は「白人の政府が問題である」と考えるであろうし、進歩的白人の社会学者は「黒人の貧困が問題である」と考えるかもしれない。またある白人の労働者は、「黒人は怠け者であり働く気がないのが問題だ」と断言するかも知れない。つまり、アポロ計画のようにwhatは既に明確に与えられていて、そのwhatをいかに達成するかというhowに精力を集中する手法であるシステム工学やシステム分析などは、問題が何か明確に定義された状況のもとではワークしたが(ケネディ大統領自身がアポロ計画の目的をはっきり宣言している)、社会問題の様に関わる人々の見方、考え方によって問題状況における問題の捉え方が異なり、whatが不明確で曖昧な問題状況においてはワークしなかったのである。

しかしこれは考えようによっては、問題状況におけるwhatが明確に定義されているか否かの状況の性格に依存する問題ではなく、われわれ自身の状況の捉え方の問題でもある。つまり、人々の思いが問題状況の捉え方に大きく影響してくるような分野においては、「何が問題か」それ自身が問題的なわけである。見方によってはアポロ計画でさえこのプロジェクトに対する否定的な見解は当時からあったのであり、計画自体を社会的問題として捉える事も出来たはずである。しかしながら、いったんケネディ大統領が決裁を行なった後は、計画そのものの是非はオフィシャルには問われなかったのである⁷⁾。

1960年代から70年代にかけて、この様な従来のシステム方法論の経営問題や社会問題の分野での応用が失敗したことの反省に立って、システム方法論も含めた「システム論」の研究はいろいろな新しい試みが行なわれてきた。その中でも特にラディカルな動きを推進してきたのが、英国ランカスター大学のP.チェックランド教授を中心にしたソフトシステム方法論(SSM)のグループである。このグループも初めは、システム工学やシステム分析を経営問題に応用しようとしていろいろなケースを研究していたが、そこで彼等もまた問題自身が問題的であるような複雑で混乱した状況の壁にぶつかっていた。そして1970年代の初め頃から、いくつかの失敗事例の経験を踏まえて全く新しいシステムアプローチを開発していった。

ランカスターのグループは、アクションリサーチ(行為研究)を通じてシステム概念を現実の経営問題に応用しようとしていたところから、その行為研究の学習の中から新しいシステム論の枠組、方法論を紡ぎ出す事が出来た。彼等の言う「行為研究」とは、経験を踏まえたリフレクションを通じた「行為からの学習」によって、常に新しい理論的枠組や方法論を「経験的知識」として探索していくものであって、決して科学的真理を追究するための「客観的で明示的な知識」を目的とするものではない。そのとき「行為研究」とは、観察者としての行為の研究ではなくて、当事者として行為に介入し関わっていく研究である。その柔軟な研究の姿勢が、現在「ソフト」と言われているシステム方法論を案出する大きなきっかけになったのである。

ソフトシステム方法論(SSM)の特徴は、従来のハードなシステム方法論(システム分析やシステム工学を彼等はそう呼ぶ)が、与えられた目標へのゴールシーキングのための方法論、すなわち所与の問題の解決の方法論だったのに対し、ソフトなシステム方法論では、複雑な相互関係を維持している状況の中で、関わる人々自身の見方、考え方(世界観)を前面に出して議論し、リフレクションするという学習の方法論を提示しているのである。そしてハードではいかに効率よく効果的に問題が解決できるかが方法論の評価基準であったのに対し、ソフトではアクションプランの状況への導入の際の文化的可能性が評価の基準となるのである。いいかえれば、ハードが科学的唯一解を前提にしたいわば客観的システム方法論であったのに対して、ソフトは解釈学や現象学をベースにした(間)主観的(主観性を導入したという意味で)システム方法論であるといえることができる。そしてそれは、「システム」の捉え方を観察者から当事者、三人称から一人称へシフトしたシステム論のパラダイムの変換である⁸⁾。

(2) 従来のシステム論の陥穽

現在、「システム」という言葉は「リスク管理システム」とか、「世界経済システム」「金融システムの破綻」「学校システムの崩壊」「介護システム」等とあらゆる状況、場面で人口に膾炙する日常語になっている。その場合、これら「システム」という語は大体として「体系的な」、「順序だった」、「合理的な仕組み」というぐらいの意味合いで日常語の中に入ってきていると見ることができる。この意味での「システム」は、英語で言うところの「システマティック (Systematic)」に相当するであろう。しかしながら英語の「System」にはもう一つのシステミック (Systemic) という形容詞形があって、こちらの方は「全体としてのシステムの」、とか「システム特性を持った全体性の」と訳すことができる。具体的にはシステム特性とは、創発性・階層性・コミュニケーション・コントロールの四つの性質を言っている。最近の金融危機における「システミックリスク」と言った場合は、むしろこの後者の意味を強調していると思われる。

しかし、問題はいずれの場合も「システム」という言葉が、現実世界にシステムがモノとして内在していると仮定して、そのモノとしてのシステムのラベルとして使用されているか、あたかも現実に存在している仕組みがシステムであるかのように使用されていることにある。「システム」という概念の応用は『一般システム理論』(1968)を著した、生物学者のフォン・ベルタランフィによって始められたものとされているが、彼は元来全体を構成する各部分ではなく全体としてみた有機体に関する概念を一般化し、「システム」という抽象概念を使用したのだが、そのすぐ後では、同じ言葉を現実の世界の部分であらわすラベルとして使ってしまったのである。教育問題の専門家が、教育提供の仕組みをシステムとして捉えてみようというのと、その仕組み自体がシステムであるというのとでは訳が違う⁹⁾。コンピュータシステムを含め、多くのシステム分析家や設計家が陥っている陥穽はここにある。

なぜならもしシステムを現実に内在 (reside) するモノのラベルであるとするならば、システム論とは自然科学のように現実に埋め込まれたシステムを科学的に分析するものであり、実証的に検証されるべきものであって、したがってそこには問題状況を全体として捉える人間の一人称の視点 (主観性) が入り込む余地がなくなるからである。またシステムを組織体 (人工物) であるとするならば、システムとはデザイン (設計) される対象物であり、ある与えられた目的を効率よく合理的に実現する機械であって、そこにはやはり人間が主体的に関わることによって全体として現れてくる創発性が入り込む余地はないのである。

システムの創発特性 (emergent property) とは、「全体は各部分の単なる総和ではない」という良く知られている表現に見るように、全体にはその部分部分の総和としては意味を成さないような、その全体性に関連した特性が見られるということである。自転車を乗り物として捉えることは、自転車が全体として現す創発特性を把握することである。しかしここで見逃してはならないことは、たとえば乗り物としての自転車の創発性は、決して自転車という実在物に内在する固有

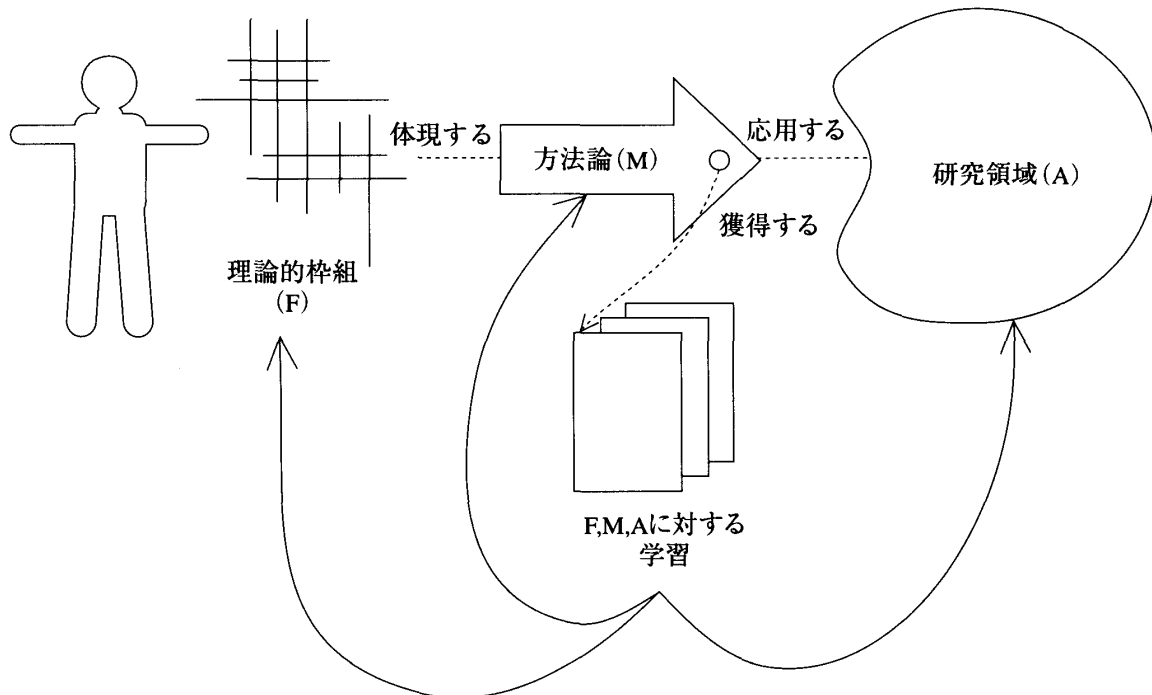
の特性ではないということである。なぜならば赤ん坊にとって自転車は単なる危険物かも知れないし、市役所の職員にとっては駅前に放置された自転車は取り除くべき邪魔物に過ぎないだろう。つまり自転車に関連して現れてくる創発特性とは自転車に関わる人々がそれぞれの視点で意味づける特性以外の何物でもありえない。ある意味ではこの創発性はきわめて私的、主観的な特性である。簡単に言ってしまうと、「システム」とは、自転車に内在 (reside) するあるモノのラベルを言っているのではなく、自転車について語る人と自転車のあいだに所属している (belong) 見方、考え方、思い、といったコトを「システム」として見なすことだ、とすることができる。そう考えれば、自転車を乗り物と見なす人からすればハンドルは方向をコントロールするためのものであり、ペダルは動力を人が伝えるためのものであり、車輪は円滑に自転車を走らせるためのものであり、これらの部分部分の意味付けの集大成としての乗り物としての自転車を考えれば、その意味では「部分の総和は全体に等しい」のである¹⁰⁾。われわれが、自転車に全体としてある意味づけを行なうことができるのは、実は自転車にその性質が既に与えられているのではなく、逆にわれわれ自身が生き物として知覚した現実の意味づけを行なうことができる能力を備えているからに他ならない。

このことを別の言葉で言い替えれば、モノのラベルとしての「システム」とそれを意味づけ運用するコトとしての「システム」は同じ「システム」という言葉は使っている、システムのクラスが全く違うということである。情報システムと言う場合でも、「情報システム」自体と「情報システムを使うシステム」は同じシステムでも全くクラスが違う。だから情報システムの失敗をよく情報システム自身のせいにするが、むしろ、大体において「情報システムを使うシステム」のほうが問題な場合が多い。SSMの発案者であるチェックランドは、このモノとしてのシステムとコトとしてのシステムを、「人工システム」と「人間活動システム」とに区別した。そして、どんな「人間活動システム」も、ある特定のものの見方、考え方あるいは世界観 (Weltanschauung) から記述されるに違いないということを主張する。つまり「人間活動システム」とはそれぞれの世界観に依存するモノの見方、考え方によって表現されるある種の内発性 (purposefulness) であり、決して現実に存在しているモノの表象ではなく、人々が現実を探索するプロセスに埋め込まれ所属しているコトとして考えなければならないということである。

(3) ソフトシステムズ方法論

「システム」が人間の見方、考え方に関連している点を鋭く看破し、新しいシステムアプローチ (ソフトシステムズ方法論: SSM) を創始した英国ランカスター大学のP.チェックランド教授は、従来のシステム論を「ハードシステム思考」と名付け、次の様に指摘する。「従来のハードシステム思考では知覚する現実にシステムが存在するという前提にたっているが、(彼の主張する) ソフトシステムアプローチでは、現実世界を探索するプロセスそれ自身が、自らをシステムとして作り上げることが可能である。そしてSSMでは、それ自身がシステムミックスなプロセスである循

図1 研究の基本形となる3つのエレメント
 (P. チェックランドによる) 巻末文献 (78)



環的な方法論で、そのプロセスの中でたまたまシステムのモデルを活用するのである¹¹⁾」。

図1において、ある理論的枠組 (F) を体現した方法論 (M) で研究領域 (A) にアプローチしたとき、そのアプローチから研究領域 (A) に対する学習が起こるのはもちろんであるが、同時にアプローチの方法論 (M) とその方法論に体現されている理論的枠組 (F) にも新しい学習がフィードバックされFとMがF'とM'に変化していく。つまりSSMのプロセスは、Aに対して自己言及的であるばかりでなくF, Mに対しても自己言及的なのである。これはSSMが「はじめに」で考察した、コード (この場合はF) とプロセス (この場合はM) にも自己言及が及ぶオートポイエーシスになっていることを端的に示している。

前述した通り「ソフト」なシステム方法論は、「ハード」なシステム方法論の現実世界での失敗からアクションリサーチの「行為からの学習」として誕生したものである。つまり、図1においてFを自然科学的理論枠組として、Mを科学的実証主義的方法論としたとき、人間の含まれる雑雑な状況においてこのF, Mがうまく機能しなかったことから、FとMに自己言及的に反省を加えFとMを「ハード」から「ソフト」に変えていったという経緯がある。そのときこのアクションリサーチとしてのF, M, Aへ自己言及するプロセス自体が、既にオートポイエーシス論を含意していた訳である。

別の言い方をすると、チェックランドのシステムモデルは「認識論的デバイス (epistemological device)」であると言う。つまり、ある問題状況にシステム論を応用するとき、ハードシステム思考法では、現実の表象モデルを作り、それをなるべく現実のシステムに近似させ (ハードシステム思考では現実にシステムが存在していると仮定しているので)、モデルを操作することによって現実をコントロールしようとする。これに対しチェックランドのソフトシステムアプロー

チでは、現実とはシステムであるかどうかは分からないが、現実を探索するプロセスの中にシステム概念を探索者自身の見方、考え方を表出したシステムモデル（「人間活動モデル」）として取り込み、この現実に関連した「思い」のモデルを媒介にして、知覚された現実と比較することによって学習を引き出し、現実を改善しようとするのである。このとき、モデル自身は現実を改善しようとする人々の認識を変革し、あるいは学習を引き出すデバイスに過ぎず、ハードシステム思考のようにそのモデルを使って現実をコントロールしようとしたり、「現実のシステム」に近似している必要は全く無い。ソフトシステムアプローチのモデルは、ただ現実に関連しているという点で現実からラーニングが引き出せれば良いのである。極論を言えば、現実が改善された後はモデルは捨ててしまっても構わない。

ここでチェックランドのソフトシステム方法論（SSM）の基本型をチェックランド自身の言葉で簡単に説明しておく。（図2参照）

まず（問題と感じられる）現実世界の状況について発見をする。問題状況に関連ある「人間活動システム」をいくつか選択する。これらの「人間活動システム」からモデルを構築する。モデルと現実を比較することによって現実世界の状況に関する質問を行なう。そして比較作業によって触発されるディベートによってその問題状況を改善するような意図的行動（アクションプラン）を決める。そして、その意図的行動を実行することによって現実自体が変わるはずだから、今度はその新しい現実をもとにして次のサイクルを始める事ができるだろう…。つまりサイクルは原理的には終わる事がない。無論関連があると思って当初選んだシステムが実際には関連がなかったこともありえる。様々なモデルを試すことによって、自分にとって本当に適切なものが見えてくるだろう¹²⁾。

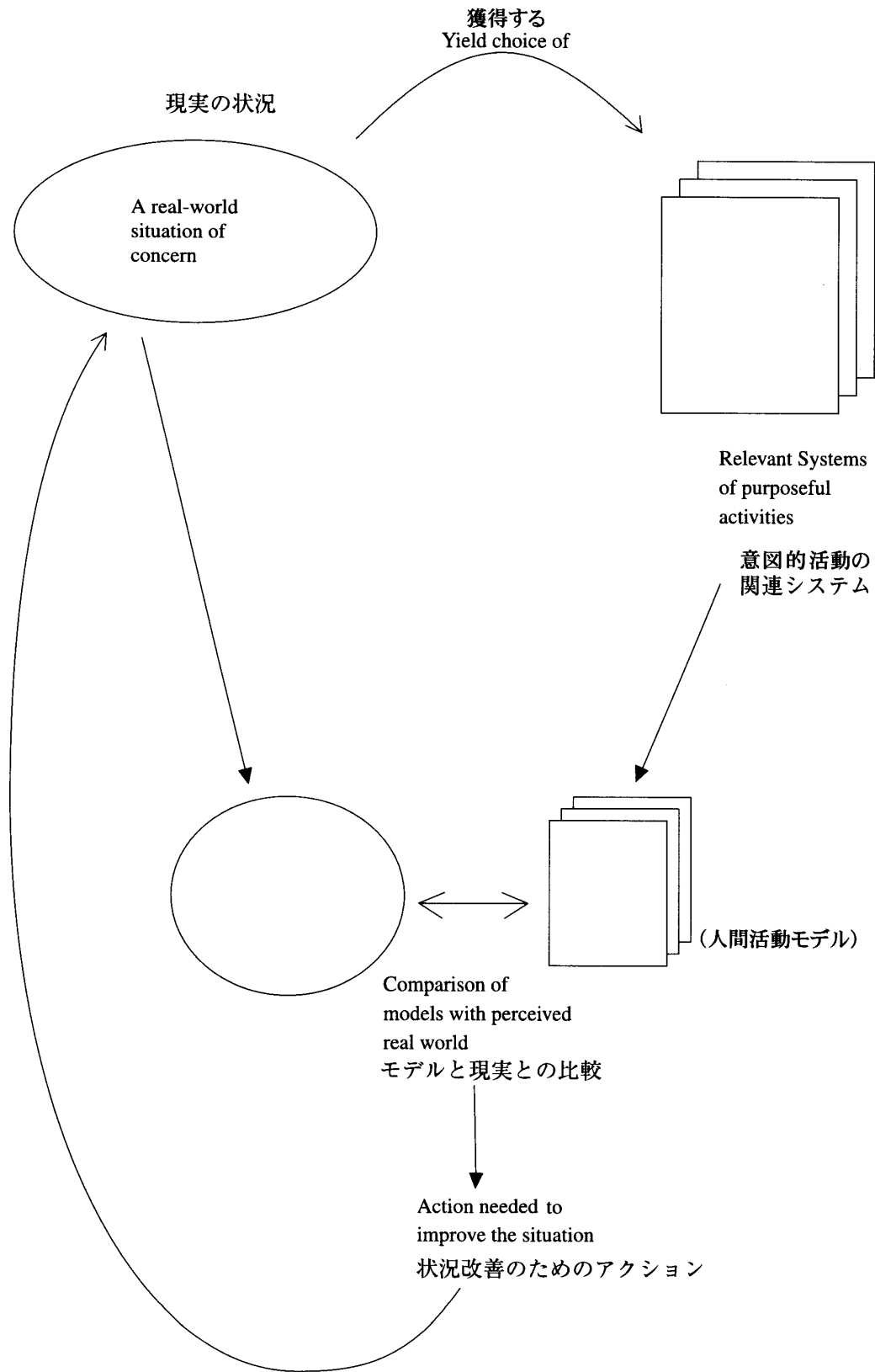
このチェックランドのソフトシステムアプローチは次の点でシステム論の領域で画期的な業績だといえる。

まず従来のシステム方法論は、客観性を重んじるあまりシステムから人間の見方、考え方や世界観という主観的側面を排除しようとし、あるいは人間をシステムの一つのファクターとしてしか取り扱おうとしなかった。これに対して、ソフトシステム方法論では従来の方法論が無視してきた「世界観」とか「価値感」というような人間の主観性を伴った課題をシステム方法論の中に直接的に採り入れることによって人間と真正面から関わる事が出来るようになった、ということがあげられるであろう。

二つ目は、従来のシステム方法論が問題のwhatは既に与えられたものとしてむしろ問題をいかに解決するかというhowに焦点を絞ったのに対し、ソフトシステム方法論は、問題がなんであるか（what）を主題的に取り扱い、そのプロセスの中に問題に関する当事者の「思い」や「主観」を取り込みながら、当事者間の合意形成による問題形成を行なう参画型の方法論を提示しえたことにあるだろう。

そして最後に、これが本論文に関わる最も重要な点なのだが、ソフトシステム方法論が「モノ」ではなく「コト」（行為的生命）と関わるシステム方法論だということである。ハードシステム思考がモノとしてのシステムを分析的に扱うのに対して、ソフトシステム方法論では現実状況の探

図 2 Basic Shape of SSM



(After P. Checkland 1990)

求者がその探求を行なう方法論のプロセスの中にシステムを「コト」として位置づけたのである。言い替えればソフトなシステムアプローチとは、現実世界に存在するシステムを対象にしてそれを分析するハードなシステムアプローチから、現実世界と出会いそれを探索する行為のプロセスの中にシステム概念を埋め込み、かつプロセスとしての認識行為（コト）と認識された現実（モノ）との間の、システムモデルを媒介にした自己差異化を行う。(図2のSSMの基本型のモデルと現実との比較の部分)。これはハイデッガーの「在るモノ (Seinendes)」と「在るコト (Sein)」のあいだの存在論的差異の構想とも比肩しえる、「認識するコト」と「認識したモノ」との差異を主張する根本的なパラダイムの転換をわれわれに迫るものであると言えるのである。

モノ・コト論については、木村¹³⁾、廣松¹⁴⁾、小林¹⁵⁾などが質の高い議論を既に展開しているが、本論文では次に節を改めて、これらの中で特に木村の「アクチュアリティ」の議論をフレームワークにしてチェックランドのソフトシステムズ方法論を再考していくことにする。

(4) 木村のリアリティ／アクチュアリティ論

ハイデッガーが「在るコト」と「在るモノ」との二重性 (duality) における根本的な差異を主張し、チェックランドが「認識 (するコト) のプロセス」と「認識 (したモノ)」との二重性における根本的な差異を主張したのなら、木村敏のアクチュアリティ／リアリティ論の場合は、この「存在論的差異」と「認識論的差異」を更に二重化した「生命論的差異」を主張していると見ることができよう。「生命論的差異」とは、簡単に言えば「生きているコト」のアクチュアリティと「生きているモノ」のリアリティとの二重性における差異である。われわれは、生きモノであると同時に生きているコトを現在進行形でその都度経験しながら生きている。あるいは「生命そのもの」を生きているといってもよい。しかしその場合、「生命」とは個体の有限な生命を言っているのではなく、ヴァイツゼッカーが言う「生命そのもの」、つまり通時的には今まで地球上に存在した全生命およびこれから存在するであろう全生命と、共時的には現在生きている地球上の全生命を指している。

ここで二重性 (duality) と言ったのは、二元性 (dualism) との違いを明確にしておきたかったからである。木村の「生命論的差異」という概念は単にアクチュアリティ(コト)とリアリティ(モノ)の二元論的差異と言っているのではなく、「Aはそれ自体Aと非Aの差異もしくは関係であり、Aと非Aの境界である」というような、アリストテレスの排中律に従わないような二重性における差異のことである¹⁶⁾。

たとえば、「自己」というものは、生きものにとって、昨日の自己と今日の自己はモノとしては差異がありながら、コトとしては同一性を保持している。このようなモノとしての自己と、コトとしての自己の二重性のうえに「自己」という事態は成立している。

この木村のアクチュアリティ／リアリティ論はそれ自体決して簡単な概念ではないが(何故ならアクチュアリティを言語化し概念化することは原理的に不可能なので)、SSMをオートポイエー

システムとしての生命論的システム論として捉えるときは不可欠な議論（強力な分析道具であるが、ある意味では劇薬でもある）になるので、たとえば木村の次の様な説明を引用しよう¹⁷⁾。

「リアリティ」と「アクチュアリティ」という二つの用語は、本書の中でしばしば対立概念として用いられている。辞書の上では両方とも「現実性」や「実在性」の訳語が当てられている、実際にもかなり漫然と類語として理解されているようである。しかしそのラテン語の語源をたどると、リアリティのほうは「行為、行動」を意味する*actio*に由来している（*actio*は「行う、行動する」を意味する*ago*の過去分詞から作られた）。つまり同じように「現実」と言ってもリアリティが現実を構成する物事の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われるのに対して、アクチュアリティは現実に向かってはたらきかける行為のはたらきそのものに関して言われることになる。

つまり、リアリティとは現実の認識的な側面、アクチュアリティとは現実の行為的側面を言っている。たとえば、リアルな時間とは時計の文字盤上（空間）に大小2本の針で表示されるような公共的客観的時間、いわば「いつでもどこでも誰でも」認識できる時間であり、アクチュアルな時間とは「角砂糖がコーヒーの中に溶けていくのを待っている時間」とか、「列車の発射時刻まであと一杯紅茶が飲める」という時間で、私的で状況に依存する実感を伴った時間である。たぶんふつうの人の感じる現実というものは、純粹なリアリティでも純粹なアクチュアリティでもなく、両者が互いに浸透し交じり合った現実だろう。しかしながらある種の精神疾患（離人症）においては、現実の実在感であるアクチュアリティが喪失する場合がある。その場合、患者が知覚能力、感覚機能に何一つ障害を持たず、思考・記憶・認知・判断などの知的能力も形式的には全く冒されていないにもかかわらず、自分の生活している世界——周囲の世界だけでなく内面の世界も含めて——の「現実性」ないし「実在性」がまったく感じられないということが起こる¹⁸⁾。この症状の場合、現実にはリアリティ（モノ）として何ら支障無く認知が行なわれているにもかかわらず、患者は時間と時間の「あいだ」やテレビドラマの場面と場面の「あいだ」が感じられないし、比喩的表現が理解出来なくなる。つまり個々のモノの、辞書に載っているような客観的な意味は理解できても、チェックランドのシステム論で論じたような全体として現れてくるような創発的（*emergent property*）な主観的な意味づけができなくなるのである。その結果、患者は自己の現実感を喪失するのである。この現実感を木村は五感で認知できる現実／リアリティ（モノ）に対比させてある種の“共通感覚”でしか捉えることのできないアクチュアリティ（コト）と名付ける。つまりアクチュアリティとはリアリティとの二重性における生命的な現実感のことなのである。

この種の「共通感覚（*Common Sense*）論」は、アクチュアリティ論とは親類関係にあり中村雄二郎（参考文献（44））などに詳しいが、ここでは立ち入った考察をすることができない。ただし、通常の英語の*Common Sense*（*common sense*）が、世間の人々のあいだに共通するあたりまえの判断、つまり常識をいっているのに対し、ここでいう*Common Sense*=共通感覚とは、五感のあいだに共通するある種の高度な感覚をいっていることを指摘しておく。

通常われわれは、「現実をよく見ろ」などと言うとき、それは夢や幻でないという意味で現実を考えている。つまり現実／想像上の (imaginary)、架空の (fictions) という軸を仮定している。しかし問題は、「現実をよく見ろ」の「見る」という言葉に現れているように、ここでいう現実^レは事実 (fact) = 認識された現実 (リアリティ) にすりかわってしまっている。現実のもう一つの側面である行為的現実 (アクチュアリティ) の方は反省的意識^レからするりと抜け落ちてしまっている。現実とは、リアリティ／アクチュアリティの混ざり合った事態なのに、そして「現実をよく見ろ」と言ったとき、発話者は明らかにアクチュアリティも含めて言っているのにもかかわらず、どうしてアクチュアリティが抜け落ちてしまうかという、それは普通の人にとっては、アクチュアリティはあまりにも自明のことでありそれを意識することは容易ではないからである。自明性を喪失した離人症の患者だけがそのような意味でアクチュアリティの側面をきわだって意識できるとも言える。つまり彼らはアクチュアリティの喪失をリアルに苦しんでいるのである。

この様にアクチュアリティを言語化するのは容易なことではないが、もう一つ木村の「音楽の例」をここで述べておきたい。われわれが音楽を演奏しているとき、それが音楽として演奏しつけられるためには、われわれは音楽を単なる物理的な音としてではなく音楽全体として (as a whole) 聴きながら演奏することが必要である。それは過去に鳴った音、現在鳴っている音、将来鳴るであろう音を別々の音としてではなく、音楽全体として (つまり創発特性を以って) 聴く必要があるということである (先のモノとしての自己とコトとしての自己の差異における同一性、同一における差異性という二重性を思い出してほしい)。そしてこの全体としての音楽が鳴っている「場」は、それぞれの音が鳴っているリアルな空間ではなくて、いわば演奏者と空間のあいだのアクチュアルな「場」(西田哲学の根元的な自他同一の場所) である。この様なアクチュアリティが音楽の演奏から喪失したとき、音楽はたちまちただの雑音に墮してしまうだろう。それゆえ、音楽のアクチュアリティを保持しつづけるためには、常に音楽を全体として意味づける創発特性が働いていなければならない。それと同時に重要なことは、このアクチュアルな音楽の聴こえてくる場は、共同で合奏している人々 (当然聴衆も含めて) にも共有されているということである。ある意味で合奏者は同じ音楽をアクチュアリティの場で聴きながら演奏していると言ってもよい。そしてその為には、全体として創発してくる音楽というものが個別の演奏者の個々人がそれぞれ別々に聴いているというのではなくて、むしろ音楽がそれ自体の現われ (自己触発) として人々のあいだにアクチュアルに顕現していなくてはならない。その意味でアクチュアリティには、「創発性」と「顕現性」の二重の契機が考えられる。

このアクチュアリティの二つの契機については木村が『コギトの自己性』¹⁹⁾ の中で、ミシェル・アンのデカルトの「コギト」解釈を引きながら「ノエシス的」自己、「集合的」自己というコトバで詳述しているが、ここでは同値のことを「創発性」、「顕現性」というシステム論の用語で置き換えた。

(5) 思いの「モデル」とアコモデーション

チェックランドのソフトシステム方法論 (SSM) では、現実の状況をエンドレスな常に変化する事象 (event) と観念 (idea) の相互作用の流れとして捉える²⁰⁾。マネジメントの方法論としてのSSMは、この流れにどう対処するのかという一つの方法論を提供するものである。

状況 (situation) を事象 (event) と観念 (idea) の相互作用と捉えるという考え方は、チェックランドがヴィカーズ²¹⁾ から借用してきたものだが、われわれの文脈から言えば木村の「リアリティ／アクチュアリティのからみ合いの場」ということになるだろう。ところが伝統的な西洋のコンテキストでは木村の意味でのアクチュアリティレベルの考察が欠けているために、どうしても個人を主体にした観念 (idea) とリアリティである事象 (event) の相互作用ということになってしまう。附言しておけば、これは廣松のモノ／コト論にも言えることではないか。廣松の四肢構造は、アクチュアリティ／リアリティの契機をむしろイデアール／レアルの契機として捉えているからである。

つまりチェックランドは、マネジメントというものを、この流れの一部を認識し、評価し、行為について決定し、その行為を行なうことであり、またその行為自身は過ぎ行く事象と観念の一部となって新しい認識と評価を行ない、今度は次の行為を導いていくという「オートポイエーシス (自己産出)」のプロセスとして考えている²²⁾。そして次のように指摘する²³⁾。

マネジメントの「問題」というものは、たまには一時的に「解決」され存在しなくなるかもしれないが、それは一連の継続的な過程の中では、ほんの特別なケースに過ぎない。ある特定の時点を選べばすべてはこの流れとして見られるのだ。このときSSMではマネージにかかわる個人やグループは究極のところ自律した存在であるから、個人やグループが違えばそれぞれ異なった評価尺度を持ち、それゆえ異なった行為をするだろうと仮定する。このため論点が生まれ、それにマネージャーが対処しなければならないのである。確かに認識と評価がある程度重ならなければ、集団生活はありえないので、この重複こそわれわれが「組織」と呼ぶ存在を実質的に成り立たせているのである。

そこでSSMでは、この各自の状況に対する見方、考え方を「人間活動モデル」として表現し、これらを媒介として使いながら個人間グループ間の合意形成をしようとする。その時このプロセスを整合的 (coherent) に遂行するためにシステム概念が役立つだろうということである。

そしてここで重要なことは取り出されたモデルは現実のモデルではなく、現実に関連するモデルということになる。つまりザ・システムを発見するのではなく、各自の現実に対する見方をモデルとして表現し、現実の改善にもっとも関連ある (relevant) モデルをシステム概念を使って探索するのである。そして各モデルは必ずそれを表現する人なりグループの世界観を伴っているということから、われわれはモデルどうしの調停を通じて、各自、各グループ間の世界観を調停していることになる。ここで急いで付け加えておくべき事は、この調停、合意形成が、いわゆるコンセンサスメーキングではないことである。英語のコンセンサス (consensus) とは100%の同意 (agreement) であるのに対して、SSMで言っている調停／合意形成とは、互いの違いを尊重しな

がらの、ある行動レベルの合意、つまり異なった世界観の同居（アコモデーション／accommodation）なのである。例を挙げれば、第二次大戦後のベルリン統治とか、自民党／公明党／保守党の連立政権、卑近な例では、嫁姑の同居とかがアコモデーションの例としてあげられる。つまりこれらの例では完全な世界観の一致（コンセンサス）はなく、ともかく行動レベルで一致しましょう、ということである。これを英語の「同居」の意味もあるアコモデーションという用語を使って現している。言い換えれば、SSMとはマネジメントの状況（場）における問題（what）設定のための合意形成、つまりアコモデーションを形成するプロセスであるということが出来る。

行動レベルの合意（アコモデーション）ということとは、われわれの文脈からすればリアリティレベルの合意であるコンセンサスと区別して、アクチュアリティレベルの合意と解釈することができる。その一つの理由として、先に述べたようにアクチュアリティ／リアリティのラテン語の語源としてアクチュアリティは「行為、行動」を意味するactioに由来し、リアリティの方は、「もの、物事」を意味するresから来ていると考えると参考になる。

前述のように、SSMでは状況を無常の事象と観念の相互作用の流れと考えているので、これをどう捉え表現するのかのモデル、つまりこの現実の問題状況にある個人やグループの世界観で切り取ってくるモデルはコトや動きを現す動詞で表現することになる。つまり一つのトランスフォーメーション（変換運動）として現実を捉えることが、コトやアクチュアリティのレベルの「人間活動システム」をモデルとしての言葉で表現することに通じるのである。たとえば、刑務所に関する状況を「人間活動システム」として次のように動詞を使って表現することができる。

- －犯罪者を更生させるシステム
- －犯罪者を罰するシステム
- －犯罪者から社会を守るシステム
- －次世代に犯罪ノウハウを伝授するシステム
- －犯罪者を一般の人から隔離するシステム
- －刑務所の職員に職を与えるシステム
- －小説のネタを仕込むシステム

この様に、コトやアクチュアリティをベースにした「人間活動システム」として現実を捉えた場合、現実状況の見方、考え方は幾通りもありうるわけで、その動詞（変換）表現としてのモデルのいずれが正しいかを定めることはできない。そこで関わる人々のあいだにあるアクチュアリティレベルの「思い」をこの各自の見方、考え方を反映したモデルを媒介にしてアコモデーションしていくことがSSMのマネジメントの一つのステージである。もちろんこの現実決して純粹なリアリティでもアクチュアリティでもなく、コトとモノの錯綜した、アクチュアリティとリ

アリティの混じりあった現実である。だからSSMでは方法論的（つまり作為的）に、このアクチュアリティ／リアリティの錯綜した現実から一種の純粹形としてのアクチュアリティを表出したモデルを取り出し表現する。言い換えれば「思いのモデル」をいくつか作る。そして、この複数のモデルを媒介にして各自各グループの思いのアコモデーションを図ろうとするのである。そのとき、このアクチュアリティの表出であるモデルのアコモデーションのプロセス自身がアクチュアリティレベルの上の変換と捉えることができる。

なぜアクチュアリティ（コト）の表現は動詞で行い、リアリティ（モノ）の表現は名詞で行うかということは、失語症にかかった患者が、まず名詞（特に固有名詞）を思い出せなくなり、動詞については相当の程度まで正常を維持するという症状が参考になる。更に言えばこのことは、われわれの記憶とは、脳の内部に空間的に「名詞」としてデータベース化しているものではなく、むしろアクチュアリティそのままに時の中に積み重なっているものだということを示唆している。

ここで、なぜ「思いのモデル」が、アクチュアリティの表出になっているのかを、木村²⁴⁾の議論を下敷きにして以下に説明してみる。

われわれは、現実世界のいろいろな物や人にある「思い」を抱くわけであるが、この「思い」とは厳密な意味で純粹に私的な、私自身とこれらの物や人との「あいだ」の認識以前のアクチュアリティとしての歴史に基づいている。そしてこの決して客観化出来ないという意味で、認識以前の全体としての歴史が私にとっての相手との意味（言語学以前の）を作り出している（創発性）。たとえば、ここに何十年も前に当時の彼女から贈られた万年筆がある。この万年筆は、私が彼女と関わった全歴史が思いとして詰まっており、ある意味では、この万年筆は私に思いを触発することによって、このモノの意味を私に語りかける（顕現性）。「思い」とは、前に述べたアクチュアリティの二契機である「創発性」と「顕現性」を完備した私と物や人とのアクチュアルな「あいだ」の領域に属するものである。だからわれわれが関わる状況を思いを伴った見方、考え方でモデルとして言語で表現するとき、それは状況（場）から触発された「思い」が言語表現以前の「言おうとすること」になり、そしてそれがモデルとして言語の形をとって外に押し出される（ex-press）アクチュアリティの表出として捉えることができる。

このSSMのアクチュアリティの表出としての「思いのモデル」は、「ハード」なシステム思考のモデルである「現実（リアリティ）の表象のモデル」（例えば計量経済学のモデル）とは全く次元を異にしている。この違いをチェックランドはハードの「現実のモデル」とソフトの「現実に関連するモデル」という言い方で区別したのである。

この様に「思いのモデル」を形成することによって、ハードでは起こらないアクチュアリティレベルの実感のある「行為による学習」を獲得することがSSMで初めて可能になる。たとえば、ロンドンのブリティッシュミュージアム（大英博物館）を訪れる日本人観光客を見ていると、多くの人がガイドブックを片手に、「あ、あれ、この写真とまったく同じだわ」と、現実の建物とガイドブックの写真が同じ事を確かめて感激している場面に出会う。これはまさに写真であるリア

リティのモデルと現実の建物が同じものであることの検証である。しかし、このような確認作業だけでその見学者本人に何らかの学習やアクチュアライゼーションが起こるであろうか。むしろリアリティのデータはほとんどなかった明治初期の欧州使節団の参加者が、渡航前にいろいろ思い描いていた彼らの思いと、現実の建物を見たときの差異から学ぶ学習のほうはるかに大きいのではないだろうか。つまりSSMの（方法論としての）目的は、アクチュアリティベースの「思いのモデル」を使った経験のリフレクションであり、そこから行為による学習（learning by doing）を獲得することである。だからそれは、「現実（リアリティ）のモデル」の実証による科学的知の獲得を目的とするハードシステム思考の「仮説／検証」スキームとはパラダイムを全く異にすると言わねばならない。

（6） アクチュアル・トランスフォーメーション(AT)とリアル・トランスフォーメーション(RT)

ここでトランスフォーメーション（変換）をリアリティレベルの変換（RT）とアクチュアリティレベルの変換（AT）に区別しておく必要がある。

この世の中の事象には多くのトランスフォーメーションを考えることが出来るが、われわれが陥りやすい誤解はトランスフォーメーションとはその帰結であるアウトプットが常に明確に見えているとってしまうことである。たとえば自動販売機を考えると、アウトプットであるコーラやジュースは自明であると考えられる。むしろわれわれは自動販売機のところにコインを持って行くのは、コーラやジュースを買う明確な目的があるときだけである。

では自動販売機のインプットとは何であろうか。多くの「システム論」の教科書には、インプットはコインであると書いてある場合があるがこれは誤りである。トランスフォーメーションという概念は因果関係とは違い、インプットがその変換によってアウトプットにトランスフォーム（trans-form）されなければならない。この場合スループット（トランスフォーメーションの中身）を考えてみればすぐ分かることだが、どう想像しても「コイン」が「コーラ」や「ジュース」には変換されないことがわかる。自動販売機の場合はインプットをコインとすれば、アウトプットは使われたコインであり、アウトプットを「コーラ」や「ジュース」とすれば、インプットは売れる前の「コーラ」や「ジュース」であるとしなければならない。すなわち、変換という概念はスループットである変換プロセスがインプット／アウトプットを同じ次元の上で繋ぐものでなければならない訳である。

このことから、自動販売機は「人間活動システム」としてみたととき、いろいろな変換のシステムとして捉えることができることがはっきりする。つまり「コーラを売るシステム」、「子供が小遣いを無駄遣いするシステム」、「通行の妨げになるシステム」等々。そこでもし変換の概念を正しく捉え、「コーラを売るシステム」を売れる前のコーラが売れた後のコーラになる変換としよう。その時われわれは変換のアウトプットであるコーラを明確に定義することができるであろう。しかし、「子供が小遣いを無駄遣いするシステム」は、小遣いを無駄に使う前の子供が小遣いを無駄

に使った後の子供になる変換だ、というのはいいとして、ではそのインプット／アウトプットは明確に定義できるだろうか。「小遣いを無駄に使う」ということは、「コーラを売る」というときほどアウトプットは明確に定義することは難しい。

そこで、「コーラを売るシステム」のようにアウトプットが先に分かっているか、明確に定義できる変換をリアル・トランスフォーメーションと呼ぶ。通常われわれが目的と呼んでいるものは、われわれが明確に定義できリアルに存在するものとわれわれが思い込んでいる場合が多い。国家目標、企業の目的、また受験生の大学受験の目的はすべて、建前上はアウトプットとして明確に定義されていて、われわれは餌に向かって一直線に走るねずみの如くその目標に向かって最善の変換を試みる訳である。

これに対して、「子供が小遣いを無駄に使うシステム」のようにアウトプットが明確に決定出来ない変換もある。たとえば、「新米の先生がベテランの先生になる」とか、「子供が大人になる」といった場合、ベテランの先生とか大人とかいったものが、それが実現される前に明確に定義できているであろうか。あるいは、ベテランの先生にいつなったかを明確にチェックしたり、大人になった時点を明確に規定できるであろうか。この場合のトランスフォーメーションは、「コーラを売る」というようなアウトプットのはっきり分かる変換とは違い、常に現在進行形のアクチュアルな変換である。つまりこの場合の変換としては、「子供が小遣いを無駄に使いつつあること」「先生がベテランになりつつあること」であり「子供が大人になりつつあること」ではないのか。

よくよく考えてみるとわれわれのまわりは、リアルな変換よりもアクチュアルな変換に満ちており、生命あるものは常にアクチュアルな変換を自ら行ないながら生きているのではないか（この様な変換がオートポイエティックなプロセスであることは先の議論から明らかである）。それを我々は、科学の因果観に捉われて、あたかもアウトプットが先に確定しているようにみる癖がついているのではないか。子供が大人になる。木の芽が膨らみ花を咲かせ、どんぐりが大きな葉を茂らせ、クヌギの大木になる。すべて命あるものは、アクチュアルなトランスフォーメーションを行為している。そしてアクチュアルなトランスフォーメーションの特徴は、アウトプットの不確定性にある。これに対しリアルなトランスフォーメーションの特徴はインプットの確定性である。ヴァイツゼッカー²⁵⁾が言うように、まさに生命のこの非決定性は生命物質の不可解な属性でなくして、逆に一定の未来を生み出す必然的な実現条件なのである。言い換えれば、生命は非決定性を法則とするのである。

ここでRT（リアル・トランスフォーメーション）とAT（アクチュアル・トランスフォーメーション）をもう一度整理しておく、RTは自動車の製造のようにアウトプットがその仕様の細部に至るまでリアリティとして事前に明確になっており、反対にインプットの方は、いわば事後的にその可能（possible）な組み合わせをいくつも考えることが出来るような変換である。一方ATとは、進化における眼の出現のようにアウトプットは事前には明確に分からず、反対にインプットとして眼のニーズのようなものが潜在的（virtual）に先にあり、それが次第に実現（アクチュ

アライズ) されていくような変換である。言い換えれば、RTとは、ポッシブルからリアルへの変換であり、ATとはヴァーチャル（仮想という意味ではなく本来のヴァーチャルとは潜在性 (latent)）からアクチュアルへの変換であると定義できる。

このATがヴァーチャルからアクチュアルへの変換であり、RTがポッシブルからリアルへの変換であるというアイデアは、木村敏、ヴァイツゼッカー²⁶⁾ 及びドゥルーズ²⁷⁾ のベルグソン解釈からヒントを得たが、ドゥルーズのベルグソン解釈においては、アクチュアライゼーション、リアライゼーションという「現実化」、「実在化」の変換は、どちらかといえば、アクチュアリティ／リアリティを二元論化 (dualism) するものであり、われわれのアクチュアリティ／リアリティの二重性 (duality) の観点からいえば、むしろこの両者の複雑な関わりこそが問題になる。そこでこの二重性の実態を方法論化するにあたって、筆者は次節で説明するようにアクチュアライゼーションとリアライゼーションをリアルとアクチュアルを橋渡しするゲシュタルトクライス (構造円環) として捉え、その媒体としてAT/RTを新たな概念として設定し、AT/RTをそれぞれ、アクチュアリティレベル上のヴァーチャル (virtual) からアクチュアル (actual) への変換、リアリティ・レベル上のポッシブル (possible) からリアル (real) への変換として再定義した。

ここで重要なことは、このRT/ATの区別は、チェックランドが主張しているハード/ソフトの区別に対応しているということである。つまり、SSMが目指しているアコモデーションは、あらかじめデザインできるような変換ではなく、SSMのプロセスの中で、ATを通して副次的に現われてくるものである。SSMでは (現実の問題状況から) 現実に関連する「思いのモデル」を作り、このモデルを媒介にしてアコモデーションを志向する。そのとき「思い」は、アコモデーションを形成するATにおけるインプットとしてのバーチャリティにあたる。そしてATは常に形成している現在進行形のプロセスであるから、完全な終了時はありえず、SSMの参加者が必要なアコモデーションに達したと感じた時、恣意的にSSMプロセスを中断する。これに対し、ハードなパラダイムでは、はじめに決められた目標であるアウトプットが与えられていて、このアウトプット産出のための可能性としての複数の代替案が比較分析検討され実行されるのである。RTにおいてはデザイン (design) が、ATにおいては形成 (shaping) が変換の基本になる。

そう考えると、ATはむしろそれ自身への変換でありアクチュアライジング (actualising) していく現在進行形のプロセスそのものである。つまりATはオートポイエーティックなプロセスで、常にプロセス自身に自己言及しながらプロセスを動かしていく変換である。だから、そのアウトプットはATを恣意的に中断したとき、副産物として得られるものなのだ。確かにSSMのアコモデーションのプロセスを振り返ってみると、実は何かのテーマについてのアコモデーションの結果 (outcome) が重要なのではなく、アコモデーションのプロセスにおいて生じた相互信頼とか、問題に対する実感的な学習や理解の方がこのATの狙いと言ってよく、アウトプットの方は一晩寝て考え直してみると次々と違ったものに変化していく可能性がある。

しかしここで急いで注意しておかなければならないことは、このRT/ATという概念やそもそもアクチュアリティ／リアリティという概念はいわば理念型で、分析的方法論的に区別できる概

念であって、現実の世界ではAT/RTやアクチュアリティ/リアリティというものは互いに絡み合い混じり合っているということである。ヴァイツゼッカーのゲシュタルトクライス論²⁸⁾が明確に教えているように、モノとしての認識的なリアリティーとコトとしての行為的なアクチュアリティの世界はもともと表裏が一体の関係にありながらも、相互隠蔽的に絡み合っている。あるいはまた、生命のATは物理的環境のRTの法則に一方では制約されながら行なわれるのである。われわれはこれを分析的方法論的に取り扱うときのみ、両者を区別して考えうるのである。

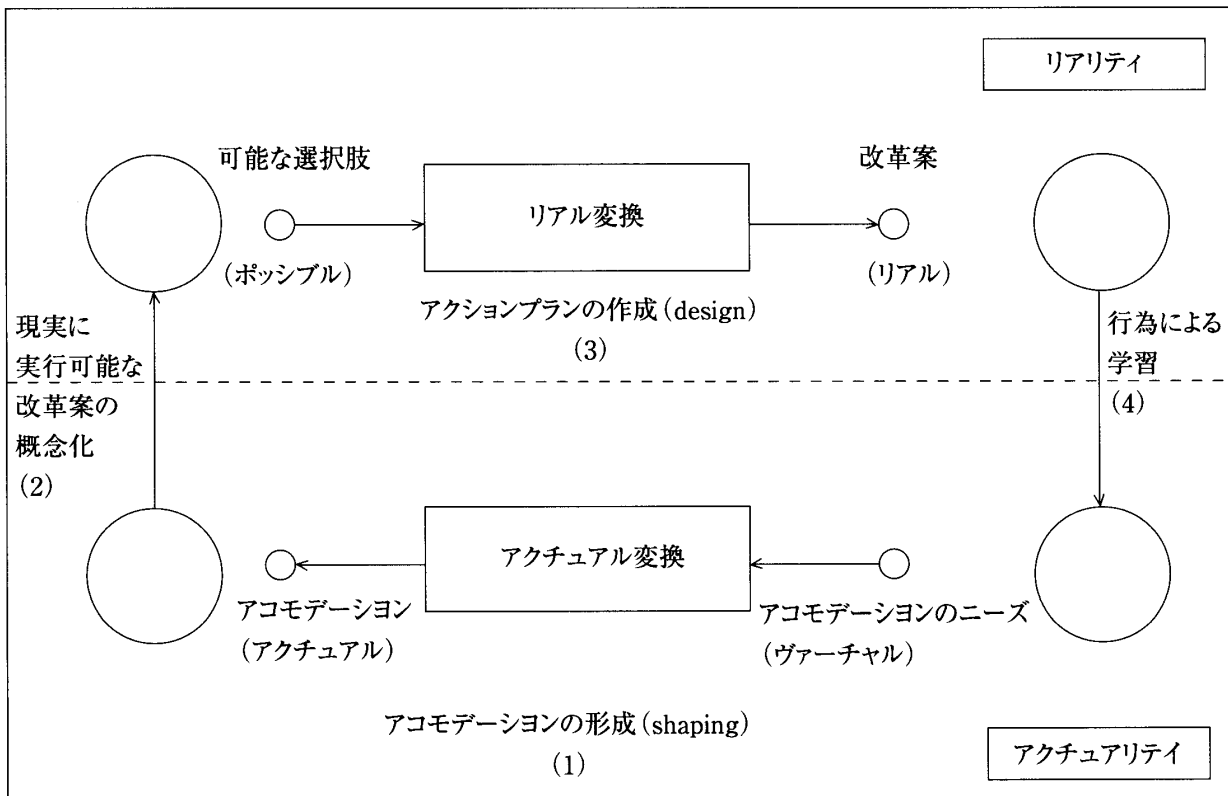
(7) アクチュアリティとリアリティを繋ぐ方法論としてのSSM

さてここで以上の議論を踏まえてSSMをアクチュアリティ論から再定義すると、SSMとは、アクチュアリティの表出である「思いのモデル」を媒介にしてアクチュアリティレベルの変換ATとリアリティレベルの変換RTを橋渡しする方法論であると主張したい。(図3参照)

図3を説明すると、まずSSMのプロセスでは、初めに問題と思われる状況(場)において状況に関わる人々が何となく感じる潜在的なニーズからスタートする。それがATのヴァーチャルなインプットにあたる。そして、この各自の問題に関わる“感じ”(われわれの文脈でいうと「思い」)をピクトリアルな表現や述語形(動詞)で表現し、この問題に対するいくつかの見方・考え方を根底定義/概念モデル²⁹⁾という形式にモデル化する。この時大切なのは、このモデルが「現実のモデル」になってはいけないことである。モデルはあくまで「思いのモデル」であり、アク

図3 木村のアクチュアリティ論からのSSMの再解釈

内山(2000) 文献(12)より



チュアリティの表現でなくてはならない。(そうでないと後で現実との比較のとき、モデルと現実とのあいだに差異がなくなり、その差異からの学習が起らない)そして、この複数考えられるモデル同士をそれらが内包する世界観に基づいて分析したり、他人のモデルと比較しながらモデルの落としどころをグループでのディスカッションで探っていく。このプロセスを通じて、各自各グループの「思い」のアコモデーションが行なわれていく。この部分がアクチュアル変換ATの部分にあたる(図3の中の(1)に相当)。前述した通りATには最終的なアウトプットがないから、どの時点でこのプロセスを打ち切るかは参加者の恣意的判断である。大体のアコモデーションが出来たと思われたと感じたところで次のステージに移る。(但し多くの経験例から、ある時間を経ると参加者の殆どがこれだと思える落としどころ“アコモデーション”に達する³⁰⁾) 次のステージは、アコモデーションされたモデルを現実のアクションプランにつなげるために、モデルを通して現実と「思い」を比較しながら、文化的可能性とシステムの望ましさを探り出す部分である。つまり、アクチュアリティとリアリティをアクチュアリティの表出モデルである根底定義や概念モデルを媒介にして比較(思いの自己差異化)していく。その結果、文化的に実行可能で系統的に望ましい実行案を探り出し、それをRTのアウトプットとして設定するわけである。これがリアライゼーションのプロセスである。(図3の中の(2)に相当)。次に、得られた実行案をRTにのせるプロセスがある。ここでは、既に明確になったRTのアウトプットを実現(リアライズ)するのに最も効率のいいRTを設計し、インプットを確定するわけだ(図3の中の(3)に相当)。そして最後に、アクションプランを実行することによってその経験を身体化(所有化)するプロセスがアクチュアライゼーションのプロセスである(図3の中の(4)に相当)。ここでは計画案の実行により、アクションから得たラーニングをまた次のSSMのサイクルのATのインプットとして再帰化していくことになる。したがってSSM全体のプロセスを見た場合、どこにもインプットもアウトプットもない「オートポイエーシス」のシステムとなっている。

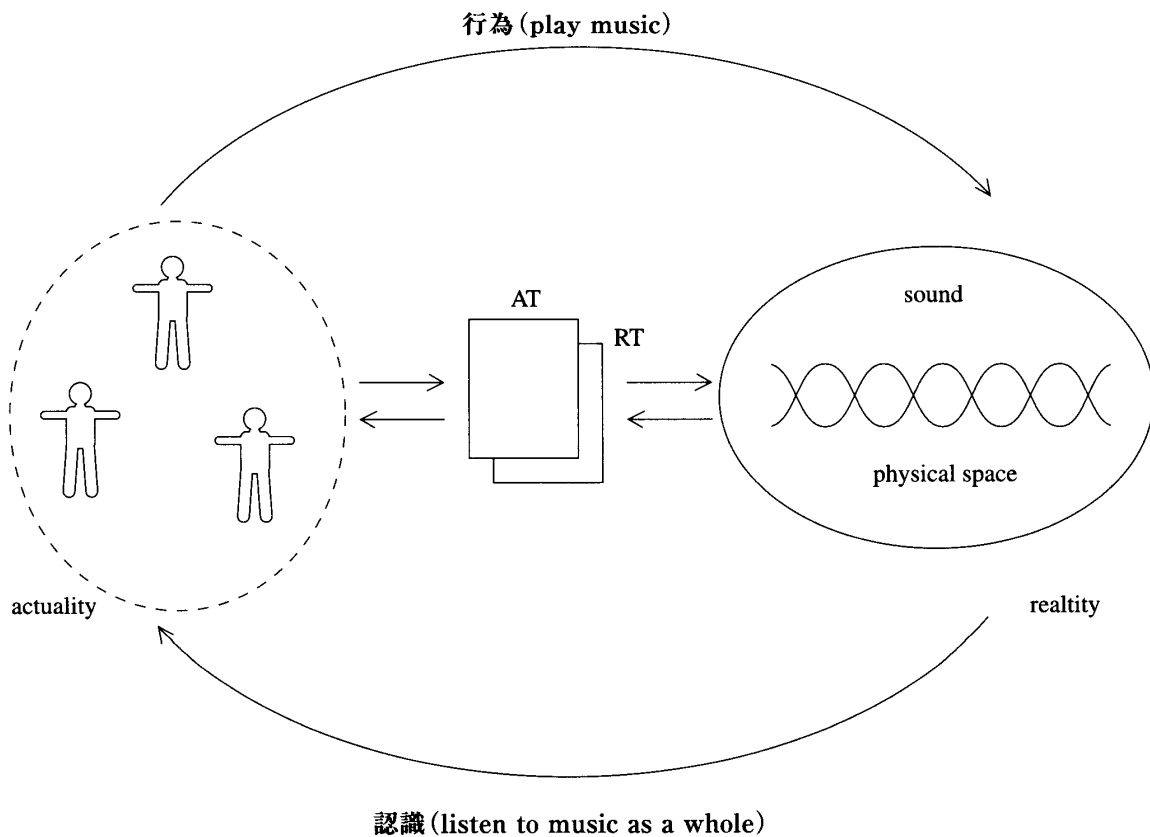
以上の議論から明らかなように、SSMにおいては、ソフトなアプローチであるATとハードなアプローチであるRTをシステムモデルを媒介にしたリアライゼーション(図の(2))とアクチュアライゼーション(図の(4))を使って架橋することによって³¹⁾リアリティとアクチュアリティを行きつ戻りつ補完的(相補的)に結合しているのである。

(8) まとめとして

以上P.チェックランドのSSMを木村敏のアクチュアリティ論から再考したわけであるが、ここでその結論を述べ将来の展望をまとめておく。第一には、AT/RTを使ったSSMのプロセスの説明をヴァイツゼッカーの「ゲシュタルトクライス論」(Gestaltkreis)の中に位置づけることによってSSMの一般化を図り、多様な応用を可能にする。もう一つは、SSMのキー概念をハードシステム思考と、アクチュアリティ論から解釈し直した本論文の文脈に則したSSM(これをContextualised SSM: C-SSMと呼ぶ)の両側から比較してまとめてみる。

まずSSMのプロセスをゲシュタルトクライス論的に見てみよう。そのためにここで先に引用した木村の音楽の合奏の例を再考してみよう。ピアノでもヴァイオリンでもそうであろうが、演奏者は音を出す時、いま鳴っている音を聴きながら演奏している。もう少し正確に言うなら、演奏者は過去に自分が出した音、そしていま出しつつある音、そして将来出すであろう音を全体として (as a whole) 聴いている。このことは、音を物理的音としてではなく、ある意味を持った音楽として聴きながら演奏しているということである。これをシステム論的に見るならば、演奏者は過去に鳴った音、現在鳴っている音、将来鳴るであろう音を個別に音として聴いているのではなく、それらの音がシステムとして創発する全体として意味づけられた音楽を聴いていることになる(「システムの創発性」)。しかしこの全体としての音楽の鳴っている「場所」は、現実の物理空間ではありえない。何故なら、現実の物理空間には、過去の音は既に消えており、将来出すべき音は未だ鳴っていないのである。木村はこの「音楽」の鳴っている抽象的「場」のことを「あいだ」として概念化している。つまり音楽は、人と空間の「あいだ」の場所で鳴っている(正確には前意識レベルの「あいだ」の次元から、意識化によって人と空間が現れる。つまり、われわれが音楽に聴き入っているときは、自分自身も空間上の音も意識しないであろう。ふと反省的な意識によってわれに返ったとき、われわれは音楽を聴いていた自分と空間内で鳴っていた音を認識するわけである。) さらに合奏の場合など、複数の人々の間で音楽を演奏している時は、音楽は(聴衆も含めて)その音楽を合奏する人々の「あいだ」で鳴っていることになる。このことは、

図4 ゲシュタルトクライスから見たSSM



決して楽譜がある合奏の場合に限らない。ジャムセッションのように即興でやる合奏の場合に見られるように、事前に何のシナリオも無い場合でも、音楽は音楽として共有され演奏は続けられていく。そしてこの音楽の鳴っている「場」は、各自に所属 (belong) はしているだろうが決して各自に内在 (reside) しているものではない。だから人と人の「あいだ」としか言いようのない「場」で鳴っていることになる。筆者はこの各自の「あいだ」で音楽が聴こえる事を、「システムの顕現性」として捉えられることを既に述べた。

そこで前節で述べた、ヴァイツゼッカーのゲシュタルトクライス論は、この音楽の例で手際良く説明することが出来る。(図4参照) ゲシュタルトクライス論で言っている認識／行為の一元論は、音楽の例では音楽を演奏する行為と音楽を聴く認識の一元性であり、生命の主体性の根拠であるアクチュアリティとの出会いの場が音楽の例では「あいだ」になっている。SSMではこのアクチュアルな場における認識／行為のアクチュアライゼーション／リアライゼーションの絡み合いを、AT／RTという変換を媒介にして意識的方法論的に行なおうとするものである。

ここで、アクチュアリティの実相は、全体として音楽を聴くという面 (創発性) と、現われとして音楽を聴くという (顕現性) 二重の契機を完備している。ところがチェックランドのシステム論を含めて、西欧のシステム論 (木村によればマトラーナ、ヴァレラのオートポイエーシス論でもこのことが障害となって社会システム論に発展しなかった) では、前者の創発性は視野に

表1 ハード, SSM, C-SSMの対比

K.Uchiyama(1999)

キーワード	ハード(実証主義)	ソフト(SSM)	Contextualised SSM
状況	空間 physical space	situation events / ideas	“ba” あいだ reality / actuality
システム	人工システム	purposeful human activity system (originated from self consciousness)	actuality system (originated from pre-consciousness)
モデル	現実のモデル	現実に関連するモデル conceptual (perception) model	“思い”のモデル actuality表出モデル
変換	real transformation (デザイン)	actual transformation (形成 building)	RT/AT (Gestaltkreis)
アコモデーション (モデルの純粋化)	コンセンサス	アコモデーション(同居) (public intersubjectivity)	Kohärenz(相即) (unindividualised private intersubjectivity)
比較	仮説/検証	モデルと現実の比較	(モデルを媒介にした) 自己差異化
リフレクション	実証 (マッピング)	経験の反省 reflection on action	自覚(西田) reflecting in action
学習	finding	learning by doing	actualising
outcome	科学的知	経験ベースの知	行為的知
フィロソフィー	H.サイモン	M.ウェーバー/G.ヴィッカーズ	西田 幾多郎/木村 敏

*この表の詳しい説明は、一冊分の本の紙数が必要である。詳しくは参考文献(93)を参照されたい。

入っているが、後者の顕現性は見逃している³²⁾。その理由は従来のシステム論を超えていると考えられるチェックランドのシステム論においても、システムの根拠を自己意識として自己の内部に内在するものと仮定しているからである³³⁾。音楽の例でも分かるように、アクチュアリティの「場」は自己のいわば外部としての「あいだ」の創発性と顕現性にあるのであるから、もしアクチュアリティをシステム論的に扱うとすれば、システム論は個々の自己意識というものを離れて、システムの根拠を人と人との「あいだ」に求めなければならないだろう。そのとき、SSMの基本的アイデアである「状況」、「システム」、「モデル」、「変換」、「アコモデーション」、「比較」、「リフレクション」、「学習」などの概念が、アクチュアリティ論の観点から見直されることになるだろう(表1参照)。しかしこれは、チェックランドのSSMの単なる理論上の変更という形ではなくてSSMの実践、アクションリサーチからのラーニングとしてアクチュアライズしながら行なわなければならない。つまりSSMの終わり無き学習の一環として、あくまで実践の立場からSSMの基本概念が見直されていくのである。³⁴⁾

おわりに

明治も終わりに差しかかった1900年、通算17年の米国／英国留学（放浪？）を終えた南方熊楠が、夏目漱石と入れ違いで英国のロンドンから帰国した。実は南方は彼の地で「西洋の学問はモノの学であり、心を知らぬ。自分はモノと心の交差した“事の学”を新しく作るのだ」、という抱負を抱いていたが、結局それを理論化出来ぬままに無念の帰国をしている。南方が帰国したちょうど100年後の1999年、筆者も足掛け5年の英国留学を終えて（40歳も半ばになってからの勤務先のコンピュータ会社を辞しての留学だったが）ロンドンから帰国した。そして筆者の研究テーマは木村のアクチュアリティ論を背景として英国生まれのSSMをもう一度見直し、「事の学」としてSSMを英国人に再び投げ返してやることだった。本論もその線に沿っての要約的な試論（本格的な日本語での論考については現在進行中。英文のものは参考文献³³⁾）であるが、100年前にも似たようなことを構想していた日本人が英国に滞在していたことは驚きと共にある種の強い共感を感じる³⁵⁾。

SSMはチェックランドが開発してからすでに30年の歳月が経っているわけだが、人々に本格的に理解されて応用されるのにはこれからだと思う。筆者はこのSSMが、今後日本を発信基地にした「事の学」として世界の文化のアコモデーション（違いを尊重した統合）³⁶⁾に向けて貢献することが、大いに期待できるのではないかと思っている。

謝辞

出身も専門分野も全く異なる筆者をご引見下さり、懇切極まるご指導を賜った木村敏先生に、深甚な謝意を捧げさせていただきます。

注

- 1) 河本英夫『オートポイエーシス』1997, 青土社。
- 2) 前出, 河本 (1997), p.155。
- 3) 前出, 河本 (1997), pp.160-1。
- 4) ただしここで注意すべきは、「一人称」と言ったのは一人称複数も含むということである。詳しくは「(8) まとめとして」参照のこと。
- 5) Checkland, P.B., *System Theory and Management Thinking, American Behavioural Scientist*, 38(1), 1994.
- 6) Rosenhead, J.(ed)(1989), *Rational Analysis for a Problematic World*, Wiley.
木嶋藍訳『ソフト戦略思考』1992, 日刊工業新聞社。
- 7) ところで一般の社会問題や経営問題においては、はじめからアポロ計画の様な強力な目標の合意形成や意思決定が行われることは希である。実際、企業のいろいろな問題はその企業の業務に責任を持つそれぞれのレベルの人々や専門家が、それぞれの職掌の中で利害関係を斟酌し、代替案を銜衡しながら意思決定していくのが普通である。
私がここで想定している社会問題や経営問題のマネジメントのやり方は、いわゆる日本の「コンセンサス経営」とか「実感経営」というものに近いが、欧米のトップダウンのマネジメントにおいては経営の目標や問題は客観的、科学的に設定できかつ評価できるという前提に立っている。しかし、野中・竹内(文献50)も指摘するように、うまくいっている欧米の企業においては、客観的知識とともに組織の色々なレベルの人々が共有している主観的知識(暗黙知)を重んじてマネジメントを行っているという事実がある。
- 8) しかしながら、我々日本人から見て大変興味深いのは、実はこの方法論が我々日本人が企業や社会のいろいろなレベルで実際に行なっている意思決定やマネジメントに非常に近いということである。もちろん、チェックランド自身日本の経営やマネジメントについての知識や理解は全く持っていなかったにもかかわらず、この方法論はある意味で日本の意思決定やマネジメントを非常にうまく説明しているのである。言葉を替えて言えば、外国人にはわかりにくい日本的経営の暗黙知の部分、或いは本音・建前の二重性の部分を、見える形で(透明性をもって)システム方法論の中に組み込んだと言える。ただし、あくまでこの方法論は英国のコモンセンスをベースにした英国生まれの方法論であるから、日本的経営とSSMを結び付けるには、SSM自体をもう少し一般的な理論的枠組で見直す必要がある。そこで筆者は、経営学とはいささか違った分野ではあるが、現象学的精神病理学者、木村敏のリアリティ/アクチュアリティ論をその理論的枠組として借りてきた。そしてこの理論的枠組から、SSM自体を生命論的システム論として再定義しようと試みた。
- 9) Checkland & Scholes (1999), *Soft Systems Methodology in Action*, Wiley, p.21以下。
- 10) 松田正一編著『システムと行動』1983, 泉文堂, p.22以下。
- 11) 前出 Checkland & Scholes (1999) p.22.
- 12) 前出 Checkland & Scholes (1999) p.6.
- 13) 木村敏『時間と自己』中公新書, 『あいだ』弘文堂など。
- 14) 廣松渉『存在と意味』1982, 岩波書店。
- 15) 小林敏明『〈ことなり〉の現象学』1987, 弘文堂。
- 16) 木村敏『からだ・こころ・生命』河合ブックレット29, 1997, p.47.
- 17) 木村敏『偶然性の精神病理』1994, 岩波書店, pp.12-13.
- 18) 木村敏『分裂病の詩と真実』1998, 河合文化教育研究所, p.129.
- 19) 木村敏「コギトの自己性」, 中村雄二郎・木村敏監修『講座 生命』Vol.1, 1996, 哲学書房。
- 20) 前出『ソフト戦略思考』pp. 90-100.
- 21) Vickers, G. (1995), *The Art of Judgement*, SAGE Publications.
- 22) Checkland, P.B., *System Theory and Management Thinking, American Behavioral Scientist*, 38(1), pp.75-91, 1994 by Sage Publications Inc.

- 23) 前出『ソフト戦略思考』p.100.
- 24) 木村敏「意味の歴史性」中村雄二郎・木村敏監修『講座「生命」'98』Vol.3, 1998, 哲学書房。
- 25) ヴァイツゼッカー 木村敏訳『生命と主体』1995, 人文書院, p.32.
- 26) 木村敏「リアリティとアクチュアリティ」, 中村雄二郎・木村敏『講座「生命」'97 vol.2』1997, 哲学書房及びヴァイツゼッカー前出『生命と主体』p.29以下。
- 27) Deleuze, G. (1991), *Bergsonism*, Zone Book, NY., pp.96-97.
- 28) ヴァイツゼッカー 木村敏・浜中淑彦訳『ゲシュタルトクライス』1975, みすず書房。
- 29) 根底定義とは、現実の状況がどう見えるかの思い入れの表現であり、状況に関する why, what, how が動詞形で記述されている。概念モデルとは、根底主義で表現されたいわば「～である (be)」モデルを実現するために必要な「～する (do)」のモデルで通常7±2個の動詞の組み合わせでその動詞の論理的依存性に基づいた結合の形で表現する。前出 Checkland & Scholes (1999) を参照。
- 30) たとえば水島温夫「経営戦略：ソフト・システム型アプローチの必要性について」三菱総合研究所編『21世紀型社会への構図』1991, ダイヤモンド社, 123ページ。「わかった」という実感：「ソフト・システム型による意思の集約を進めていくと、面白いことにある時期に急に一つの合意が形成されることが多い。それまで空まわりし、行き詰まっていた議論が、あるメンバーの発言や、新しい視点の提示によって、ガラッと動き出すのである。そして、それもほとんどメンバー全員が同時に「これでいける。わかった」という目から鱗の落ちる実感を持つものである」。
- 31) このプロセスは、野中・竹内の「知識創造」の四つのプロセスモデル (Nonaka & Takeuchi, *The Knowledge-Creating Company*, Oxford University Press, 1995, p.72, Figure 3-4) と実質的にはほぼ一致している。
- 野中・竹内の図の中の「暗黙知」を「アクチュアリティ」に、「形式知」を「リアリティ」と読み換えてみれば、「AT/RT」が「Socialization/Combination」, 「アクチュアライゼーション/リアライゼーション」が「Internalization/Externalization」に相当することは明白であろう。
- 尚、このことは偶然の類似以上の意味がある。野中も筆者も相当な年数日本企業での経験を踏んだ上で米欧に留学し、日本での経験をリフレクションさせている。その結果が類似するのは、そこにある種のアコモデーションが働いていると考えられる。
- 32) チェックランドを含め、多くの西洋システム論が見逃している生命論的システムの陥穽は、このアクチュアリティのもう一つの契機でもある「顕現性」にある。チェックランドのアコモデーションは、ある意味ではシステムの「顕現性」を示唆するものだが、(チェックランドは、アコモデーションは、ある特殊な時と場を選んで現れると言っている) やはりアコモデーションは、個人の世界観を根拠としてその共有と考える傾向がある。
- 33) P.チェックランド 高原・中野監訳『新しいシステムアプローチ』1985, オーム社。
- 34) たとえばSSMのセッションをやっていて面白いことは、西洋人と日本人とではアコモデーションに関してそのやり方に大きな違いがあることである。西洋人はATであるアコモデーションを行なう時に痛みや苦しみが伴うが、日本人は喜びが伴うという経験である。英国人は、アコモデーションはポジティブなコンプライズであることは分かっているのだが、そこにどうしても自分の世界観を譲歩したという悔恨の情が伴うようである。しかし日本人は何か参加者全員で「これだ!」というものを見出した時は、大きな喜びでそれを受け止めることができる。ホンダの「わいわいがやがや」はこの一つの例であるといえる。これは、SSMの最初のステージで問題状況がそれぞれの参加者にどう見えてくるかという「思いのモデル」を作る際、西洋人の場合は自分の見え方を大いに強調するのだが、日本人は状況から現れてくる「思い」を表現する傾向があることから理解できる。別の表現でいえば状況の声を聞くのである。

この様な西欧人と日本人のアコモデーション様式の違いに関して、木村(前出『分裂病の詩と真実』84ページ以下)は、間主観性を二つに分けて、「フッサールの(西洋流の)間主観性は、論理的で明示化出来るパブリックな間主観性であるが、メルロ・ポンティの(日本人の)間主観性はむしろプラ

イヴェートな間主観性であって、参加者や仲間内にしか分からない間主観性であり、論理に乗らない明示化出来ないものだ(()内は筆者の加筆) という。この様な個別的プライベートな間主観性が、個別的な各自性の壁を越えて他者にまで広がっていくとき、木村はこれを「個別化されない私的間主観性」と言って、「公共的な間主観性」と区別している。SSMで言っている「アコモデーション」はむしろ前者の「個別化されない私的間主観性」なのだが、一人称単数の「私」の強い支配下にある西洋人にはどうもこのところの理解が難しいように思われる。

35) 最近、宗教学者の中沢新一が(『森のバロック』第五章, 1992, せりか書房)で、南方熊楠の業績をオートポイエーシス論から見直しているのが注目される。

36) このような試みはすでに筆者とチェックランド教授によって国際協力銀行(旧海外経済協力基金)のスポンサーシップを得て、「違いを尊重した統合」をテーマに、南アフリカ共和国で1997年から1998年にかけてSSMコースを実際に行ない、多くの参加者の共感を得て論文も出されている。

Uchiyama, K. (1999) Reconciling the "Global" and "Local" by Using Soft Systems Methodology : A Case of Building Trust Relationships in South Africa, *Journal of Scientific and Industrial Research*, Vol.58, March-April, 1999, pp.302-320, New Delhi, India.

また、フィリピン共和国(1999年)、ヨルダン王国(2000年)でも筆者による同様のSSMコースが試みられた。

参考文献

- 1) アンリ, M. 山形頼洋他訳: 精神分析の系譜, 法政大学出版局, 1998.
- 2) 石井威望監修: 経営革新はミドルから—ソフトシステム型経営革命がいまはじまる, 日本実業出版社, 1991.
- 3) 石井誠士: 癒しの原理, 人文書院, 1996.
- 4) 今田高俊: 自己組織性, 創文社, 1992.
- 5) 今田高俊編: リアリティーの捉え方, 有斐閣, 2000.
- 6) ヴァイツゼッカー, V., 木村敏訳: 病いと人, 新曜社, 2000.
- 7) ヴァイツゼッカー, V., 木村敏訳: 生命と主体—ゲシュタルトと時間・アノニューマ, 人文書院, 1995.
- 8) ヴァイツゼッカー, V., 木村敏他訳: ゲシュタルトクライス, みすず書房, 1995.
- 9) ウィルソン, B., 根来龍之監訳: システム仕様の分析学, 共立出版, 1996.
- 10) ウェーバー, M., 富永祐治訳: 社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」, 岩波文庫, 1998.
- 11) ウルリッヒ, H., プロプスト, G. 編, 徳安彰訳: 自己組織化とマネジメント, 東海大学出版会, 1992.
- 12) 内山研一: 現場の学としてのアクションリサーチ—SSMの理論と実際, 看護管理Vol. 10, 2000.
- 13) 内山研一: Quasi-Publicのすすめ: 現場の「公共性」, 公共哲学第10巻, 東京大学出版会, 2001 (予定)
- 14) 内山研一: 情報システムに「思い」をいかに取り込むか? 経営情報学会誌, Vol. 9, No4, 2001.
- 15) 川喜田二郎: 野外科学の方法, 中公新書, 1973.
- 16) 河本英夫: オートポイエーシス—第三世代システム, 青土社, 1997.
- 17) 河本英夫: オートポイエーシスの拡張, 青土社, 2000.
- 18) 木嶋恭一: 交渉とアコモデーション, 日科技連, 1996.
- 19) ギデンズ, A., 松尾精文他訳: 社会学の新しい方法基準, 而立書房, 1987.
- 20) 木村敏: 人と人との間, 弘文堂, 1972.
- 21) 木村敏: 自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学, 弘文堂, 1981.
- 22) 木村敏: あいだ, 弘文堂, 1988.

- 23) 木村敏：からだ・こころ・生命，河合ブックレット29，河合文化教育研究所，1997.
- 24) 木村敏：分裂病の詩と現実，河合文化教育研究所，1998.
- 25) 木村敏：生命のかたち／かたちの生命，青土社，1992.
- 26) 木村敏：自覚の精神病理，紀伊国屋書店，1993.
- 27) 木村敏：偶然性の精神病理，岩波書店，2000.
- 28) 木村敏：心の病理を考える，岩波新書，1994.
- 29) 小林敏明：アレーテイアの陥穽，ユニテ，1989.
- 30) 小林敏明：〈ことなり〉の現象学，弘文堂，1987.
- 31) 佐伯胖・佐々木正人編：アクティブ・マインドー人間は動きのなかで考える，東京大学出版会，1996.
- 32) 佐伯胖：認知科学の方法，東京大学出版会，1986.
- 33) 佐々木正人・三島博之編訳：アフォーダンスの構想，東京大学出版会，2001.
- 34) 佐々木正人：アフォーダンスー新しい認知の理論，岩波書店，1997.
- 35) 清水博：生命知としての場の論理，中公新書，1996.
- 36) 竹内啓：近代合理主義の光と影，新曜社，1979.
- 37) シャーマー，C.，露木恵美子訳：自己超越する知識，組織科学，Vol. 33, No. 3, 2000.
- 38) チェックランド，P.，スクールズ，J.，妹尾堅一郎監訳：ソフトシステムズ方法論，有斐閣，1994.
- 39) チェックランド，P.，高原康彦他監訳：新しいシステムアプローチ，オーム社，1985.
- 40) デネット，D.，山口泰司訳：解明される意識，青土社，1998.
- 41) ドゥルーズ，G.，宇波彰訳：ベルクソンの哲学，法政大学出版会，1992.
- 42) ドレイファス，H.，門脇俊介他訳：世界内存在，産業図書，2000.
- 43) 中村雄二郎：場所，弘文堂，1989.
- 44) 中村雄二郎：共通感覚論，岩波書店，1985.
- 45) 中村雄二郎：西田幾多郎，岩波書店，1983.
- 46) 中村雄二郎：臨床の知とは何か，岩波新書，1992.
- 47) 中村雄二郎・木村敏監修：講座生命，Vol. 1～3，哲学書房，1996～98.
- 48) 中村雄二郎・木村敏監修：講座生命，Vol. 4，河合文化教育研究所，2000.
- 49) 根来龍之：異質な視点を生かすSSM型意思決定，ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス，ダイヤモンド社，1992.
- 50) 野中郁次郎・竹内弘高著，梅本勝博訳：知識創造企業，東洋経済新報社，1997.
- 51) ハイデッガー，M.，高保珠樹訳：言葉についての対話，平凡社，2000.
- 52) ハイデッガー，M.，渡辺二郎訳：ヒューマニズムについて，ちくま学芸文庫，1997.
- 53) 廣松渉：世界の共同主観的存在構造，講談社学術文庫，1991.
- 54) 廣松渉：もの・こと・ことば，勁草書房，1987.
- 55) 廣松渉：事的世界観への前哨，勁草書房，1979.
- 56) 廣松渉：表情，弘文堂，1989.
- 57) ブランケンブルク，W.，木村敏他訳：自明性の喪失，みすず書房，1998.
- 58) ブルデュ，P.，今村仁司他訳：実践感覚，みすず書房，1995.
- 59) ベイドソン，G.，佐藤良明訳：精神と自然，生きた世界の認識論，思索社，1990.
- 60) ベイドソン，G.，佐藤良明訳：精神の生態学，新思索社，2000.
- 61) ベルグソン，H.，岡部聰夫訳：物質と記憶，駿河台出版社，1996.
- 62) ベルグソン，H.，河野与一訳：思想と動くもの，岩波文庫，1998.
- 63) ポラニー，M.，佐藤敬三訳：暗黙知の次元，紀伊国屋書店，1989.
- 64) 松田正一編著：システムと行動，泉文堂，1983.
- 65) 松田正一：システムへの誘い，泉文堂，1985.
- 66) マトラーナ，H. R.，ヴァレラ，F. J.，河本英夫訳：オートポイエーシス，国文社，1991.

- 67) 三菱総合研究所編：21世紀型社会への構図，ダイヤモンド社，1991.
- 68) 村上陽一郎：文明の中の科学，青土社，1994.
- 69) 村瀬雅俊：歴史としての生命，京都大学学術出版会，2000.
- 70) リクール，P.，久米博訳：他者のような自己自身，法政大学出版会，1998.
- 71) レヴィン，K.，猪俣佐登留：社会科学における場の理論，誠信書房，1962.
- 72) ローゼンヘッド，J. 編著，木嶋恭一監訳：ソフト戦略思考，日刊工業新聞社，1992.
- 73) 鷲田清一：「聴く」ことの力，臨床哲学試論，TBSブリタニカ，1999.
- 74) 和辻哲郎：人間の学としての倫理学，岩波書店，1974.
- 75) 和辻哲郎：日本語と哲学の問題，和辻哲郎全集第四集，岩波書店，1962.
- 76) Checkland, P.: *Soft Systems Methodology : A Thirty-Year Retrospective*, *System Research and Behavioral Science*, Vol. 17, 2000.
- 77) Checkland, P.: *Systems Theory and Management Thinking*, *American Behavioral Scientist*, 38 (1), 1994.
- 78) Checkland, P. & Holwell, S.: *Action Research; Its Nature and Validity*, *Systemic Practice and Action Research*, 11(1), 1998.
- 79) Checkland, P. & Scholes, J.: *Soft Systems Methodology in Action*, Wiley, 1990.
- 80) Checkland, P. & Holwell, S.: *Information, Systems, Information Systems*, Wiley, 1998.
- 81) Checkland, P. : *Rhetoric and Reality in Contracting; Research in and on the National Health Service*, Flynn R. & Williams, G. Eds.: *Contracting for Health, Quasi-Markets and the National Health Service*, Oxford University Press, 1997.
- 82) Checkland, P. et al.: *The use of soft systems methodology for developing HISS and IM & T strategies in NHS Trusts*, *Healthcare computing*, 1996.
- 83) Deleuze, G.: *Bergsonism*, Zone Book, 1991.
- 84) Heidegger, M.: *The Basic Problem of Phenomenology*, Indiana University Press, 1988.
- 85) Heidegger, M.: *Poetry, Language, Thought*, Harper & Row, 1975.
- 86) Nonaka, I. & Takeuchi, H.: *The Knowledge Creating Company*, Oxford University Press, 1995.
- 87) Schön, A.D.: *The Reflective Practitioner*, Arena Ashgate Publishing Limited, 1995.
- 88) Stringer, E.T.: *Action Research*, Sage Publications, 1999.
- 89) Taggart, R. Eds.: *Participatory Action Research*, State University of New York Press, 1997.
- 90) Cooper, A.M.: *Action Research in Health Care*, Blackwell Science, 2000.
- 91) Uchiyama, K.: *The Reconciliation between Reality and Actuality; A Model of Decision Making by Using Soft Systems Methodology*, Wilby, J. & Gregoly Eds.: *Human Consciousness and Decision Making, A Discussion Organised by the Centre for Systems Studies*, The University of Hull, 1997.
- 92) Uchiyama, K.: *Reconciling the "Global" and "Local" by Using the Soft Systems Methodology; A Case Building Trust Relationships in South Africa*, *Journal of Scientific and Industrial Research*, Vol. 58, pp. 302-320, 1999.
- 93) Uchiyama, K.: *Reinterpreting Soft Systems Methodology (SSM); Introducing Actuality into the Field of Management and Information Systems*, PhD Thesis, University of London, 1999.
- 94) Uchiyama, K. : *Towards the Appropriate Human Centred Information Systems; A Case Study of Japanese etail Industry*, *AI & Society*, 12(2), 1999.
- 95) Uchiyama, K. : *A New Picture of Information Systems; As a Vehicle of Reality and Actuality*, *Proceeding of ACM International Conference on Computer Ethics: Philosophical Enquiry*, London School of Economics, 1998.